



三菱マテリアル株式会社

2026年3月期決算説明会

2026年5月13日

イベント概要

[企業名] 三菱マテリアル株式会社

[企業 ID] 5711

[イベント言語] JPN

[イベント種類] 決算説明会

[イベント名] 2026 年 3 月期決算説明会

[決算期] 2026 年度 通期

[日程] 2026 年 5 月 13 日

[ページ数]

[時間] 17:00 – 18:04
(合計：64 分、登壇：22 分、質疑応答：42 分)

[開催場所] インターネット配信

[会場面積]

[出席人数]

[登壇者] 2 名
取締役 執行役社長（代表執行役）CEO 田中 徹也（以下、田中）
取締役 執行役常務（代表執行役）CFO 平野 華世（以下、平野）

質疑応答

質問者 [Q]： 前回計画に対して強い着地となっているが、その主な要因は何か。

平野 [A]： 為替の円安基調や金属価格が上昇したことに加えて、加工事業における販売数量が増加したことが主要因である。昨年度末から、タングステン製品や中間材料であるパラタングステン酸アンモニウム（APT）の価格が高騰した。それに伴う駆け込み需要が年末から顕在化し、3月に更に急増したことが、数量増として2月12日時点の業績予想からの上振れにつながった。

質問者 [Q]： 新セグメント（製錬・資源循環、伸銅品、超硬製品、高機能製品）の各事業について、在庫評価影響を除いたベースでの展望を解説してほしい。

セグメント概況 予想（製錬・資源循環、伸銅品）

新セグメント

製錬・資源循環

TC/RC悪化を銅プレミアム改定で相殺するも増強工事影響により減益の見込み

項目	26年3月期実績	27年3月期予想	増減
売上高 億円	13,290	14,288	+998
営業利益 (在庫評価影響除く) 億円	299 (341)	227 (260)	△71 (△81)
経常利益 (在庫評価影響除く) 億円	296 (334)	213 (282)	△82 (△51)
ROIC (WACC) %	6.4 (5.9)	11.2 (5.9)	+4.8 (-)

26年3月期経常利益	296
為替差	△33
価格差（販売価格）	+49
価格差（コスト他）	△13
数量差	△56
その他（営業内）	△18
受取配当金	△0
持分法損益	+21
その他（営業外）	△31
27年3月期経常利益	213

伸銅品

前期計上の在庫評価影響利益の反動減により減益の見込み

項目	26年3月期実績	27年3月期予想	増減
売上高 億円	3,581	3,879	+298
営業利益 (在庫評価影響除く) 億円	152 (62)	28 (77)	△124 (+15)
経常利益 (在庫評価影響除く) 億円	142 (52)	7 (56)	△135 (+4)
ROIC (WACC) %	6.4 (3.1)	1.1 (3.1)	△5.3 (-)

26年3月期経常利益	142
為替差	-
価格差（販売価格）	+0
価格差（コスト他）	△135
数量差	+19
その他（営業内）	△9
受取配当金	-
持分法損益	-
その他（営業外）	△11
27年3月期経常利益	7

Copyright ©MITSUBISHI MATERIALS Corporation.All rights reserved.

20

平野 [A]： 製錬・資源循環事業では、TC/RC はさらにネガティブな方向に動いているが、銅プレミアムの改定で相殺する目途が立っている。在庫評価影響を除く営業利益は、前年比 81 億円の減益を見込むが、第 4 四半期に直島においてリサイクル原料の増強工事を実施するため、炉修期間において数量が減少し、修繕費用が増加するためである。

伸銅品事業では、在庫評価影響を除く営業利益 15 億円の増益を見込む。昨年度下期から、車載向けの部品の受注が回復しており、その分の数量増が増益に寄与する見込みである。

セグメント概況 予想（超硬製品、高機能製品）

新セグメント

超硬製品

販売価格適正化を上回る原料価格高騰の影響により減益の見込み

項目	26年3月期実績	27年3月期予想	増減
売上高	億円 1,472	1,578	+106
営業利益	億円 142	134	△8
経常利益	億円 151	129	△22
ROIC (WACC)	% 6.8 (9.8)	6.7 (9.8)	△0.1 (-)

26年3月期経常利益	151
為替差	-
価格差（販売価格）	+84
価格差（コスト他）	△99
数量差	△9
その他（営業内）	+16
受取配当金	△0
持分法損益	-
その他（営業外）	△13
27年3月期経常利益	129

高機能製品

AI向け製品の増販などにより営業増益の見込み

項目	26年3月期実績	27年3月期予想	増減
売上高	億円 2,345	2,588	+243
営業利益	億円 55	73	+17
経常利益	億円 55	53	△1
ROIC (WACC)	% 3.7 (7.0)	3.6 (7.0)	△0.1 (-)

26年3月期経常利益	55
為替差	-
価格差（販売価格）	+16
価格差（コスト他）	△3
数量差	+24
その他（営業内）	△19
受取配当金	△0
持分法損益	△10
その他（営業外）	△8
27年3月期経常利益	53

Copyright ©MITSUBISHI MATERIALS Corporation.All rights reserved.

21

超硬製品事業では、営業利益が 8 億円減益、経常利益が 22 億円減益である。超硬製品の原料であるタングステン、タングステンの中間材料である APT の価格が上昇している局面下、昨年度は販売価格の適正化を進め増益を確保した。今回、原料価格の値上がりが加速している環境下、価格適正化で利益確保を図る計画ではあるが、現時点の見通しでは浸透率等の影響で、コスト上昇を価格適正化で一部カバーできていない。期中において価格適正化の取り組みを続け、増益を確保する方針だが、期初の段階ではこの形で公表している。

高機能製品事業では、営業利益が 17 億円の増益である。AI 向け製品の増販などにより増益している。AI 周辺の半導体市場は非常に好調な中、当社は恩恵を十分に享受できていなかったが、今期に入ってから、徐々に当社製品にも、その旺盛な需要が波及する形となっている。状況が良くなかったシール製品についても、受注が回復してきており、営業増益を計画している。

質問者 [Q]：旧セグメントから新セグメントへの組替えについて解説してほしい。

田中 [A]：大きくマテリアル領域とプロダクト領域とに区分しているが、マテリアル領域は素材・材料、プロダクト領域は製品を扱う。マテリアル領域は、旧金属事業における電気銅の生産、旧銅加工事業における伸銅品の製造を主な内訳としている。

質問者 [Q]：パンパシフィック・カッパー社（PPC）への合流を検討しているが、今後利益構造がどのように変化するかを教えてください。

平野 [A]：今期計画では、在庫評価影響を除いた営業利益で前年比 115 億円の減益、経常利益は 75 億円の減益を見込む。この減益は、主に PPC への参画と直島増強工事の影響による利益減である。PPC への合流に伴い、持分法適用会社へ移行するため、営業利益は減少するが、経常利益には変化がない想定で今回計画に織り込んでいる。

質問者 [Q]：PPC への合流について、交渉の進捗状況を教えてください。

平野 [Q]：PPC への合流の進捗状況については、必要な検証協議を進めているが、関連する当事者の数が多いため、当初想定していたより時間を要している。協議は終盤に差し掛かっており、近く合意内容を公表できる見込みである。

質問者 [Q]：経常利益と営業利益の段差がなくなるということは、鉱山からの受取配当金などはセグメントの外に整理されたということか。

平野 [A]：鉱山配当については、マテリアル領域セグメント外において、独立した報告セグメントとして資源事業に切り出している。

質問者 [Q]：今期の計画について、利益は減少するが ROIC は改善するということで、今期末のバランスシートはどのような変動を描いているか。

平野 [A]：PPC への統合影響、その他ビジネスのポートフォリオ見直しなどを数件織り込み、投下資本側の減少により ROIC は 0.6 ポイント改善を計画している。影響額は、今期から来期にかけて、約 3,000 億円強のバランスシートの圧縮を図る計画である。

セグメント別内訳

新セグメント

(単位：億円)	26年3月期 実績(a)			27年3月期 予想(b)			増減 (b-a)		
	売上高	営業利益	経常利益	売上高	営業利益	経常利益	売上高	営業利益	経常利益
マテリアル領域	14,270	461	448	15,498	250	215	+1,228	△211	△232
製錬・資源循環	13,290	299	296	14,288	227	213	+998	△71	△82
伸銅品	3,581	152	142	3,879	28	7	+298	△124	△135
プロダクト領域	3,818	198	206	4,167	207	182	+349	+8	△24
超硬製品	1,472	142	151	1,578	134	129	+106	△8	△22
高機能製品	2,345	55	55	2,588	73	53	+243	+17	△1
資源	-	△30	286	-	△34	337	-	△4	+51
再生可能エネルギー	62	10	8	78	15	14	+16	+5	+6
その他*	290	△35	25	153	△79	△20	△136	△43	△45
合計	18,440	605	975	19,900	360	730	+1,459	△245	△245

*その他にはその他事業、連結調整額を含む

質問者 [Q]：マテリアル領域の売上高について、製錬・資源循環事業と伸銅品事業の合計と差異があるが要因は。

平野 [A]：セグメント内の消去である。製錬・資源循環事業と伸銅品事業の間でのグループ内取引に伴う消去額が差異要因となる。

質問者 [Q]：新年度計画の全体感について、TC/RCの悪化（マイナス56億円）は銅プレミアムの改定（プラス63億円）でカバーされ、超硬製品の原料高騰（マイナス100億円）は超硬製品の価格適正化（プラス84億円）で回収、残った減益要因が、在庫評価影響と直島の炉修影響と外貨建債権債務の影響である。一過性要因の影響で減益になっているという理解でよいか。

平野 [A]：ご理解の通りである。特に、直島増強に伴う炉修期間伸長、数量差（マイナス53億円）とその他営業内（マイナス21億円）を合計した74億円は、今期は計上されるものの来期は計上されない。

質問者 [Q]：新年度の前提条件が、為替150円、銅価格500¢/lbとかなり控えめだと思うが、今の市況実勢を考慮すると、増益になる可能性もあるということか。

平野 [A]：ご指摘の通り、為替と銅価格の状況によっては上振れる可能性もある。

質問者 [Q]：超硬製品事業について、6月に値上げを発表しているが、値上げの進捗に向けた手応えとその計画への織り込み方について教えてほしい。

田中 [A]：顧客の反応は、当社に限らず各社続々と値上げを表明しているため、値上げに対して困るという反応は一般的にはあるがやむを得ないという理解を得られていると認識している。計画への織り込み具合は、計画立案時からさらに APT 価格が上昇しているため、全ては織り込めていない。

質問者 [Q]：超硬製品原料にはタングステンスクラップなども使用していると認識しているが、こちらも APT に連動して価格が上昇してしまい、コスト増に直面しているのか。

田中 [A]：APT の価格上昇に伴ってリサイクル原料も価格が上昇してきているが、APT の価格上昇ペースと比較して、リサイクル原料の価格上昇ペースは遅い。当社ではスクラップアドバンテージと表現しているが、スクラップ原料の価格上昇ペースが遅いため、スクラップ原料への転換により得られるメリットが増大している。

質問者 [Q]：スクラップアドバンテージは、新年度計画には反映されていないように見えるがどのように理解すればよいか。

田中 [A]：世界最大級のスクラップ処理能力を持っているが、昨年度からフル稼働している。スクラップアドバンテージについて、金額的な拡大は一部織り込んでいるが、量的には拡大できない。

質問者 [Q]：PPC に統合した場合の売上やフリーメタル（実収差）については、どのように変化するのか。

平野 [A]：協議項目に該当する部分となるため、回答は差し控える。

質問者 [Q]：今期は設備投資額が増加するにも関わらず、キャッシュフローが改善するのはなぜか。事業売却等と記載があるがどのようにして、フリーキャッシュフローをプラスにするのか。

平野 [A]：資金ベースで 800 億円の設備投資を計画する一方、投資キャッシュフローが 110 億円にとどまる見込みである。その差 690 億円は、ご質問の通り事業売却等によるものである。検討している複数の事業売却等を 3 月末までに全て完了させた想定でのキャッシュフローである。内容はいずれも協議検討中となっているため決定次第公表する。

質問者 [Q]：製錬・資源循環事業の新年度の会社計画の増減益要因について、実収差の部分で今回4Qも見通しから上振れたと思うが、新年度は終わった年度と大きく変わらないという前提となっているのか。

平野 [A]：実収差は先期と同じだけ今期も計上する想定とはしていない。数量としては計画から大きく乖離していなかったが、年度末における金価格の上昇が想定以上であったため、金額が増加した。今期の想定については、最も高い金額で計画を作るわけにはいかないため、先期の実績より金額が低下する見通しである。

質問者 [Q]：実収差が炉修影響で減少する部分は、滝グラフの中にある直島増強に伴う炉修期間伸長（マイナス53億円）とはまた別途発生するのか。

平野 [A]：その通りである。これについては、E-Scrapの取引条件改善により補う計画となっているため、表面上、滝グラフには現れていない。

質問者 [Q]：副産物である硫酸の価格は足元上昇しているが、前提条件について教えてほしい。

平野 [A]：硫酸価格の個別前提については、足元の価格動向や需給環境の変化を現時点で合理的に見込める範囲で業績予想に反映した。具体的な価格水準については非開示とさせていただくが、足元の上昇については、相当程度織り込んだ前提としている。

質問者 [Q]：中東情勢について、原油高の影響は大きく受けないため、反映していないとのことだが、プラス影響、マイナス影響を可能な範囲で教えてほしい。

平野 [A]：直接的な影響では原油価格の部分であるが、エグゼクティブサマリーに記載の通り、軽微と想定している。電力価格については、急激な影響を受けることはないと考えている。現時点で特段のプラスの影響は見込んでいない。

[了]